



青苗雜發句集
天

洋学文庫
文庫8
B 130
1



宗中玉層宗道著

為性後句集

成章堂藏板

玉のふ神ひり皇統の御代と記を別
あまの道出りく君の御代し
はらりそこのみちひり中よる
たをきふりけ事とあ記道なるを
上あまの由下のきもよんひり
紫のねんよら形ひきて人の
和より隈ありしるる千七

物字一

志動ひさしきいせえり字の結れ
みうは心もあらはれらるるの
京の夜は静かなる入らぬ道の
なしくん半のまもたをたむくこと
るうらもせは河川の時はあそび
あは神親お母半 名不詳
のそよよのまあ半の結るをいあ

かゝる初字のあら葉のちとら結
たの葉の初字のまもたをたむくこと
るうらもせは河川の時はあそび
あは神親お母半 名不詳
のそよよのまあ半の結るをいあ

141

なれとてまを種々の茶字あを人
あり此雙母をあり一時無じ
より草翁乃あすやせり利
物此翁をいほ那じりせり
水々水昌あかかかの昔の
かせーや時代前後とす
毛然手も持て種をいさる

〜風情の海をなせり之終
なれ母れいよひなるもか
地は接りて居て人のなるとなれ
〜あつて此力をあつて
是をい入人〜雙のふよの心を
は〜のじの中乃あはるがまぬ
れ〜も〜も〜も〜も〜も

と海に

麻兒の十と世に思ふに此は今般の言
蓮華の眼とかよはるや清浄し海
散れんはくまよを教ふ命の角

麻兒の口より此思ふよ引くはく
この里よのこれききもくもくを
そくせんゆれい習ぬまをむく
ゆのこれしきを定りたりくく
吉子海とく

蓮華のくくやいまた親二人
初日新橋の門と何よ人を産
房吉の窓に探かひく茶の言

世といなきはかきくをさくはれり
しよある人より法座の初元のを
きひくやうく衣服をくすれは
ふきもりやとく

十徳のくくろくまより今般の言

題着水

草房の梅りり松堂ありうめを言の
うろ海を白く松堂の薪水は伝と伝

水と汲よはけくも居れん家
明星れまと外山のくかろま
蓮華や花のく海島とほくはり
は免やうに是もまきりんは約親

立ま

まき川や栢の音よひうり
はに 兼よえ二日らうらね
二日の中 雪と出く音うり
もきく松の風 之及の田
麦み中りに 庵乃ま
えまきよん
あはる栢はもま

子日

うは栢葉といふは栢系なる又六
門と詠ふりいとさき

酒全出く象を杖川子日の中
子日せむ栢え家園のやゆりけ
川流く杖よむむまよ小雲式

人日

七種や七日形うし栢の流
七葉やなきて栢枝のかつし
たしくはやゆり象栢守は初葉
あ 蒨うり色きよ川やゆ加川
蒨あ六葉七葉もまはうきり
蒨は心路や栢枝とれりい
ま 於板ようそく海かき蒨の
音 蒨うり我まなれよ鈴くれん
蒨うりさそん家よ小田乃屋

養艸

ありあやあろつたりよと志し董
よととや十色よ何ぞ小葉は

左義長

たろろくたそんよの言や夕山ま
正月の葉あよはふは爆作の事

梅

ちろ梅やまゆじあしにふの自よ
梅はくやうとさきもたろよ小葉
春園はあとある里ろく免れ急

梅うしけちのまろる時為自扱
あさわかよ一掃はくやう免の飛
ふ梅や骨正月は培くけん
節の目やあかしく開く梅はさ
葉居の赤隣は即毒の如
四才より道端に梅燈梅式
軟あししは皆系とか梅即梅式
能なりし梅ぬ軟からなる梅の月
自然梅自よきさ梅印くくこのル
梅と志しよる軟の夏や遊詠の何より

園の梅ははけけよよをむとほり
やり梅乃流れしとや流路を山

柳

氷は雪のふ付初ふやふふ式
きよ取よき管らる柳の南
山うはけけけを固は柳うれ
おけけけ自とむるた春が
ひりさる園のあけけの柳式
月もやふのうにきき奔う南
月花は外とおほり乃柳うれ

青柳や折んとをれハ枝乃れ

芹

浅沃や雪かこくは芹の氣
清る雪の味やうき根の中
我影乃白髪とほむ田井の芹

鶯

天地よ今折うくは鳥の初言が
初言しき鶯たれをたもひ中
うくは鳥の木は色いもも初言ハ
鶯は池とけ鳥よも月言が

うらひをたあふりて道へて初雪は
芙蓉の香や重なる戸の玉糸
朝風はようと船を吹や二日 醉
黄鸝よたけし中へん屠蘇杯
うらひをた茶入と歌く水屋は
雪は声も梅は紅梅 ち

白魚

志す魚を梅よはれし所蓋は
鮮農粟や雪は為 水

春風

春風よのぬいけりや清涼は
友のふゆ葉と春風はととら
あはれ中よ菟薺玉も春の風
春風よけりや濁る野川 け

春雪

春は雪梅よと涼なけりたは
降込や柳ふし船よ春は雪
山茶のたまり雪はととら
梅の魚のはりぬ物り春乃雪

雪解

凍解

まきけくみりの色や圃 去
月あかりて秋をさけけり
凍るけり跡はくまふと
崔は程

陽光

陽をよまはけり下小 袖

西の店

うけう少とまよふは
紫の店

霞

けり内を眩れり
高木まきまき乃世や夕かきみ

涅槃會

祇園ん舎やあ版よ珠とかく馬
傾城のあんなる
幾まははの具や元一涅槃像

まき月

涉川の末ありやあ
跡を焼きくまよま
まは月まはるま障子一
まのあまはくま
梅あかりくま

菽入 出型

菽入やほめてふ古く暮るあり
出型の多よぬくむかゝるの南
養父入やうまよと五日のワレれま

雉子

雉子啼て流と歎う川光うれ
己の喜よ路まの顔の雉子う南
子とたのし声とわある一秋の雉子
麦小れ西とさうまはうと喜う

春鷹

春鷹丁立のつれと冬目とたか
けりつれさ之の依りや小田の丁
か能友と兼了くまう小田乃丁
層人よ訓る魚か語つれのを南

雲雀

時あはと夢ぬりか語むとり
それの内くまの菓よせてわけをな

蝶

蝶羽ゆれ落衣させん日のうら
風よ採きえくまを麦よあは向

蛙

田螺

田井水の音よあはれと啼く蛙
かゝるまゝよううまゝあはれ田螺

猫恋

けし猫の畏よまゝあはれ
角もあはれと啼く猫乃恋

菜花恋

雨よあはれ日と菜花のあはれ
菜花あはれと啼くあはれ
とりの甲くまゝ菜の花は身をあは

雛

あはれさけり古きと祝ふ雛は宿
雛あはれ親のこゝろや萩の鶯

汐子

をさかや汐子よかける萩の駒
うれしはよほほほれをあはれ
細きうらと智るるをさかやあはれ

かゝるまゝ蟹ハ道行 汐子ハ

喜田

喜田中のきよハ海をよる日角

定りなきとさめてなる極の事

花

雲の軟のみくく死ハ花は河より
浪のるを法なくくひや岸は花
花る花や夏うとそむし神 後
くぬの中折く曲は小坂の事
花さす折れぬと志ぬさりて
むやくとす流離りて夜のをか
ぬれ簑よ花さとかつく山は
蓋は流るくぬの絶るう事

散るかよふ人町や黒小袖
花は花はかきり起ぬ花う事

花曇

頭たけりぬのたひとさるはこと
舟とてさる

潮星のちち花はくく花やせん
満汐よ持りよふかの曇う事

棗棠

山吹も世にほかろ花をくひう事

花曇

涉芽生よめくり初きりて花のあり
まじりよも葉少くもれやまはれ

雑言

庭掃うぬふらちやきとて花さのにはよ
柳芽とふきて又一日をきとけりま
ま秋と常はつ海と松のそを
あまはりとも江戸紫の白ひの年
夕汐や月臨碑く小貝 丸
如月よふはけく聖道は葉色か
花さふや山茶花ききとてまはれ花

井のともも葉薺のともはきこが
まお乃山何のりもあふあめこの年
雀子はよの啼まの秋のう来
まおの海指ひつまれく啼り馬
いう免し記さや田さくまは蛇
た母しあふれは別色や柳はくく
野の梅乃咲まりかよ田打の肌
門をくりしくや山家の梅枝
まおは海指のつゆこ小動まきり

暮春

の〜〜葉は赤くまはるる
けきや花より蜂の心を
けき酒のむらさき乃
お〜〜おとまにかくれは

夏之部

更衣

君の世は法すれおけ〜
はにけりても陸をさし
體着依世ありは〜
更衣

棟花より竹より後るや
何さ魚乃る色たしあり
更衣うはな命と送り
縁ぬ〜〜ふよあさる色

佛生會

受け〜中よ生向佛あり

奉扇會

拈はると心あり魚あり心扇

牡丹芍薬

それの〜〜花並牡丹あり

芍薬をわがよつに集はうてかゝる那
袷着く牡丹よそよほしきる車

菫子

色艶画粟の巧みに足る菫の車
白菫子や美人かく飾り花は店
志しけし人の名ありて天の字は
白鬮西京よ照りけしき家月夜は
かう花日の阿まりを菫子花一重の形

杜若

杜若ものきくしよはし免ん哉

鴛鴦はかさしのかうかき川をへ

卯花

風をく卯乃花系は明らうみ
卯のふれのはなをくしはるはもて

杜鵑

是れ杜若の落雪さらく木をくあは
永若は山梅子花はけし杜宇
秋の一夢ありはよとく家本とまき
蜀魂かくや矢とほく西の中し
子度たけし憂と涙おそ部一と

横より耳はけく森むほくき度

閑居鳥

暮より暮より啼ぬか人こ鳥
日半く啼を日半く笑ふよ鷹鳩
山一里の道と送家う諫鼓鳥
これの何と枯よと啼ぬか人こ鳥

菖蒲

あや免の後の小舟は秋明の南
意ははしめかく所や何さるあめり
河舟めくきよもなふより美の店

田植

青田

植はけし秋とて日月乃門田を牽
松のけよ追くの家田とく那
是一人とせれんと子家、田唄式
秋とて君のま杭のよと田植の南
秋の店とて君を家問ふま田か

雲

菽くけやさゆりのまよそよ 雲
月は秋と地よ新う川ふ雲う南
濃の雲あを羽意ふみきれきり

牛裏舎

笹は葉の秋は本もや花は

鶉 水鶏

鶉の卵り清く暖乃多き

鶉は鶉乃現り鳴く鶉のうら

河の面水の川をさるる所うけ世の中

世のうらや鶉繩乃上と牛二筋

けうちにまはるる水鶏式

た母らやありむく鶉あり鶉鶉

凡

あゝ葉の鶉つうや凡は

凡の葉乃凡とほみく冷し

納涼

まゝはや八十をうけく月一

松一本馴くまみはをよりか

舟小病く一をとう一室の夕涼

毎折く赤蟹あは夕まみ

まゝはや魚矛口は氷は

雑夏

まゝのうらやまゝ屋まの
まゝのむとこをなり

エツとれんを肺やあらん蝸牛
我隣蚕一交依麦の 秋
角あけく牛人とんる夜燈の南

誰知盤中餐粒く皆辛苦

田中れく泣き海夕景色
緜とれ業とく未く又豆の 七
なふとく子とくみとあくき葛は花
着牛は月のうそまのか川けとり
口か一は淋く嘆りあのかく
夏中くやわ片とくむ鉢の菊

飲酒一盃の森は春此不さの
浄土とちわり

森の海や花黄は故屋の蔭有秋
暑き日や梅子にはむ山のうけ
山立や秋と僅は黍とくけ
岸やとくしてハ又月のうけ
故一了とくれあて夏森は
人ハ皆様よ用うはく核よりせんるは
蟹のちれ在中とかく美言
仰製あて人此とくとあるハ蟹の
るのちるまきるのり
とくあはれとくまきり解出乃完
秋を一あは澄るくは也の月

本日のぬいっ初稿のつくはらう
 しいの山はも屑伊勢の浪花のふ
 かと送りれきるさすくよ風雅のまれ
 きのうはあてはらうさるる人々
 ねくとて友の胡蝶さるものま

11月 11日
 11月 11日

